

巻頭言

第71回日本放射線技術学会総会 学術大会を開催して

第71回日本放射線技術学会総会学術大会 大会長
信州大学医学部附属病院 放射線部
平野 浩志



平野 浩志 先生

1. はじめに

JRC2015は、『Be Cool and Practical』をテーマに掲げ、2015年4月16日(金)から19日(日)の4日間にわたりパシフィコ横浜を会場として開催されました。本大会は、第74回日本医学放射線学会総会(大友邦会長・東京大学大学院)、第109回日本医学物理学学会学術大会(和田真一大会長・新潟大学大学院)、2015国際医用画像総合展(運営:日本画像医療システム工業会(JIRA)・小松研一会長)、そして第71回日本放射線技術学会総会学術大会(大会長:平野浩志・信州大学附属病院)の合同で開催されたものです(Fig.1, 2)。

会期中はほぼ連日天候に恵まれ、日本放射線技術学会総会学術大会の参加登録者数が5,005名と過去最高を記録したほか、3学会合計の参加登録者数が12,527名、国際医用画像総合展への来場者数が22,457名を数え、いずれも前年を上回りました。



Fig.1 JRC2015 大会役員
左から、JRC 杉村代表理事、JSMP 杉本プログラム委員長、JSMP 宇都宮実行委員長、JRST 矢野実行委員長、JSMP 和田大会長、JSRT 平野大会長、JRS 大友会長、JRS 赤羽実行委員長、JRS 國松プログラム委員長、JIRA 小松会長

2. 合同開会式

4月17日の13時から、パシフィコ横浜メインホールにて合同開会式が行われました。ステージ上で、杉村和朗・日本ラジオロジー協会代表理事、3学会大会長および小松研一・JIRA 会長が紹介され、挨拶、基調講演と続きました。

基調講演において、大友会長は東京大学の放射線医学の歴史と現状について、和田大会長は国際医学物理学学会と日本医学物理学学会の歴史について、また小松JIRA 会長はITEM 2015への思いと取り組みについて、それぞれ説明されました。私は、「トモシンセシスを友に」と題して、信州大学病院におけるDigital Tomosynthesisの開発の歴史、島津製作所との共同研究時代の成果について話しをさせていただきました。逐次近似法を応用したT-smartの開発によって、インプラントによるアーチファクトを改善した画像を供覧し、Tomosynthesisの進歩につい



Fig.2 大会ポスター

ての報告としました (Fig.3)。

また、合同特別講演は、東京大学地震研究所地震予知研究センター長の平田直先生より、「予想される首都圏の震災と地震波トモグラフィーで探る巨大地震の姿」と題してお話いただきました。

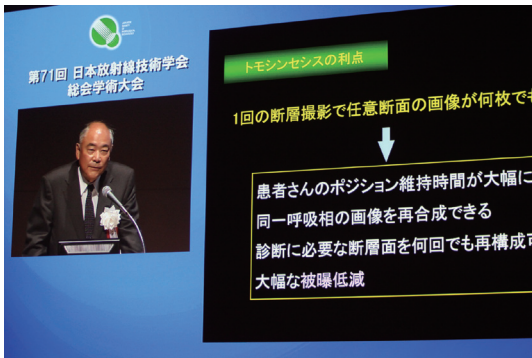


Fig.3 大会長基調講演

3. 合同シンポジウム

合同シンポジウムは、4月17日から19日の3日間にわたり、日本医学放射線学会 (JRS)、日本医学物理学会 (JSMP)、日本放射線技術学会 (JSRT) が1日ずつ企画担当する形で開催しました。

JRS企画の合同シンポジウム1は、「被ばく管理：医療被ばくの見える化」と題して、国内外から医療被ばくに関する4名のエキスパートをシンポジストにお招きし、各国の医療被ばく管理の現状についてディスカッションしていただきました。

JSRT企画の合同シンポジウム2は、「放射線治療におけるチームワークの重要性」と題して、放射線腫瘍医、診療放射線技師、医学物理士、放射線認定看護師を講師に迎え、それぞれの立場から、放射線治療における役割とチームワークの重要性についてお話いただきました。放射線治療に関わる看護職の方々にも多数ご参加いただきたいと考え、会場を国立大ホールとして開催したのですが、520名にのぼる参加者を得て活発な議論が交わされました (Fig.4)。

JSMP企画の合同シンポジウム3は、「放射線医療における自動化 (オートメーション) 技術にどう向き合うか?」と題して、4名の講師より、コンピュータ支援診断システムおよびコンピュータ支援放射線治療法などの研究開発と臨床応用における現状と課題について

お話いただき、会場との討論が行われました。

なお、合同会員懇親会は、4月17日の18時15分から、横浜ベイホテル東急を会場に盛大に開催されました。



Fig.4 合同シンポジウム2 シンポジストの皆様

4. 学術プログラム

第71回日本放射線技術学会総会学術大会のプログラムは、例年どおり、特別講演、宿題報告、瀬木賞講演、RPT誌優秀論文土井賞表彰・受賞講演、シンポジウム、教育講演、専門部会プログラム、入門講座、専門講座、海外招聘講演、国際招聘シンポジウム、科研費獲得合同セミナー、フォーラム、学生選抜セッションなど、充実した内容でした。

特筆すべきは、今回の専門部会合同シンポジウムで、「研究テーマとして考える「画像診断における読影の補助」」と題して「画像診断における読影の補助」に対する技術学会としての見解を採りあげたことです。読影補助の効果をどのような根拠をもって示すことができるか、研究テーマとして効果を科学的に検証し、技術学としてどのように取り組むかについて、専門部会としての方向性を示したものです。多くの関心を集め、「入場できません」の貼紙が掲示されるほどの大盛況となりました。

教育講座「乳癌診療A to Z」- 専門医・技師はこう考える”は4時間の連続した講座で、乳癌の診断から治療までを、「最近の乳癌の画像診断」、「細胞診の最終診断」、「外科的治療」、「術後放射線治療」と診療の流れに沿って、それぞれの権威にご講演いただきました。こちらも立見が出るほどの盛況でした。

海外招聘講演は、米国からMichael McNitt-Gray先生 (University of California, Los Angeles)、David A Clunie先生 (Pixel Med Publishing LLC, Bangor)、Pei-Jan Paul Lin先生 (Virginia Commonwealth

University Medical Center)の3名を講師にお招きしました。タイ、ミャンマー、中国、韓国、台湾とヨーロッパ各国から30名近くの海外参加者を迎え、活発な情報交換が行われました (Fig.5)。

学生選抜セッションでは、演題審査で選ばれた学生による4分間ずつのプレゼンテーションが行われました。どの発表も充実した内容で、よくまとめられていました。セッション参加者全員の投票により5名を表彰しました。



Fig.5 国際招聘シンポジウムの皆様と懇親
左から、杜下先生、Kevin O' Donnell先生、石垣先生、David A Clunie先生、村松先生、McNitt-Gray夫人、Michael McNitt-Gray先生、白石先生

5. 一般演題

一般演題は、口述発表339題、英語口述発表127題、モニタ発表130題(英語2題)、合計596題が発表されました (Fig.6)。英語口述発表は海外からの演題が13題、国内が114題で、英語口述発表の割合は口述発表全体の28%となりました。発表スライドの英語表記は一般演題全体の37%にあたり、来年のJSRT第71回大会の発表スライド全面英語化に向けて発表者の意識が高まっていると感じました。英語発表をサポートする目的で、口述発表の座長席を演者席と同じ側に配置しました。

電子ポスター発表は、呼び方を「モニタ発表」とし、二会場で開催しました。一会場に4台のモニタを設置し、1演題30分間の質疑応答時間を設けました。いずれの会場も活発な討論が行われました。

6. 実行委員会企画

シンポジウムでは、『進化する胸部単純撮影』をテーマとして、推奨される胸部画像とはどうあるべきか、進化した胸部画像をどう使うのかなど、議論が交わされました。

福井大学名誉教授・特命教授の伊藤春海先生によ

る『伊藤春海先生の寺子屋 実践：正常胸部X線像の学び方、教え方』では、プロジェクター画面3面を使用しての講義と、立体顕微鏡による肺の標本の観察、3Dプリンタで作成された肺の模型に実際に触れての構造の確認など、胸部X線画像の基本構造に関する理解と知識をパワーアップできる充実した内容でした。参加者からは「目から鱗の世界だった」と大好評でした (Fig.7)。

テレビ番組「夢の扉」にも取り上げられた、X線研究の第一人者である東北大学 多元物質科学研究所の百生敦先生には、『X線を極める —X線タルボ・ロー撮影に至るまで』と題して、X線の位相コントラストを用いた軟部組織の画像化についてご講演いただきました。

技術活用セミナーでは、救急現場で活躍される医師と診療放射線技師に講師をお願いし、「救急放射線技術の現状と課題」、「画像診断の重要性」、「救急撮影の特性と撮影条件」、「外傷Panscanの適応と有用性」、「撮影指針」、「血管内治療」についてそれぞれお話いただきました。救急現場がまさしくチーム医療の実践の場であることを実感する内容となりました。

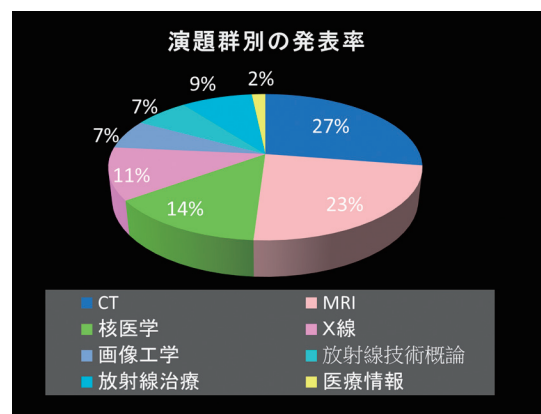


Fig.6 演題群別の発表率



Fig.7 伊藤春海先生の寺子屋

このほか、「Image Jの活用」として、DR、CT、MRIの現場における研究上の道具として、Image Jをどのように活用していくべきかを解説していただきました。また、トピックスとして、乳癌小線源治療の最先端技術であるSAVIの使用経験、3Dプリンタの活用、研究室での小動物のイメージング、獣医療における放射線診療の現状と将来についてお話していただきました。

7. 合同表彰式および合同閉会式

合同閉会式は、4月19日の15時より、JRC2015 Festival Orchestraの演奏が響きわたるパシフィコ横浜メインホールにて行われました。このJRC2015 Festival Orchestraは、埼玉医科大学放射線科の新津守先生を代表として、各学会員とITEM参加企業の有志で構成されたオーケストラです。息のあった素晴らしい演奏で、会場内を清々しさと心地よい緊張感で盛り上げてくれました(Fig.8)。

まず表彰式では、矢野敬一JSRT実行委員長の司会により3学会の受賞者が発表され、表彰状と記念品が手渡された後、記念撮影が行われました。第71回日本放射線技術学会総会学術大会は、大会長賞1名、金賞3名、銀賞7名、銅賞12名を選出し表彰しました。

続いて閉会式では、杉村和朗JRC代表理事により、内容的にもすばらしく参加者も前年を上回ったとの総括報告がなされました。また、JRC2015の各大会長・会長よりお礼と感謝の挨拶が、JRC2016の大会長・会長よりJRC2016に向けての抱負と意気込みが述べられました。

こうして、JRC2015は多くの参加者に恵まれ成功裏に幕を閉じることができました。



Fig.8 JRC2015 Festival Orchestraの演奏

8. おわりに

このたび、JRS大友邦会長、JSMP和田真一大会長、JIRA小松研一会長との最強JRC2015チームにメンバーとして加えていただき、無事に大会を閉幕できましたことは誠に大きな喜びであります。

開催にあたり、実行委員としてご尽力いただきました矢野敬一実行委員長(東京大学医学部附属病院)、梁川範幸先生(東千葉メディカルセンター)、柳田智先生(北里大学メディカルセンター)、中島正弘先生(市立甲府病院)、武井宏行先生(群馬大学医学部附属病院)に心より感謝申し上げます(Fig.9)。また、実行委員会を強力に支えてくださったJRCおよびJSRT事務局のみなさま、各学会関係者のみなさま、JIRAのみなさまに厚く御礼申し上げます。

最後に、各学会員のみなさま、ご参加くださったみなさまのご協力に改めて感謝申し上げますとともに、本大会が国際化に向けてさらなる発展を遂げ、アジアにおける国際大会の最高峰となることを祈念いたします。

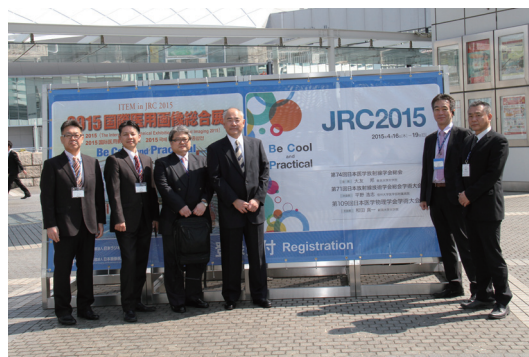


Fig.9 第71回日本放射線技術学会総会学術大会実行委員メンバー
左から 梁川範幸、武井宏行、矢野敬一(実行委員長)、平野浩志(大会長)、柳田智、中島正弘